

私の戦争体験 第40集

2018 親子で学ぶ平和学習資料

大切な大切なお話の数々
おじいさんやおばあさんが体験した



キリトリ線

- 5 あなたの住まいの地域で「戦争体験を語り継ぐ会」が開催されれば、参加したいと思いませんか？ (イ)はい (ロ)いいえ
- 6 戦争体験者は、高齢となり自分で書かれるのは、困難な方も多いと聞きます。あなたは、そのみなさまの戦争体験を聞いて、原稿を書くボランティアがあれば参加したいと思いませんか？ (イ)はい (ロ)いいえ
- 7 あなたのほかに「私の戦争体験」を読まれた方はおられますか？

(イ)いる (ロ)いない

- 「(イ)いる」とお答えいただいた方にお聞きします。それはどなたですか？
(イ)配偶者 (ロ)子ども (ハ)孫 (ニ)友人 (ホ)その他
- 読まれた方の感想があればお聞かせください。

- 8 「私の戦争体験」〈第40集〉をお読みになったご感想をお聞かせください。

- 9 最近、平和について考えたことを教えてください。

- これを^よ読んでくれた子どもたちにお聞きします。👧👦

- 10 お父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんから戦争体験を聞いたことがありますか。 (イ)ある (ロ)ない

- 11 「(イ)ある」という方にお聞きします。聞いた体験談をご家族やお友だちに話したことがありますか。 (イ)ある (ロ)ない

ご協力ありがとうございました。



爆撃を行うB-29

甲府盆地が7月6日、空襲攻撃を受けた。

午後11時、ラジオのツーツーという音が流れた。父と母と私はじっとラジオに耳を傾けた。「敵機B-29は相模湾を北上中、関東地区は厳重な警戒を要す」いつも同じコースである。だが一同ほっとしたのもつかの間、やがて空襲のサイレンが鳴り出した。敵機は富士山より甲府を直指してきたのだ。まもなく東の方でドカンドカんと大きな音がしてきた。ついにやってきたのだ。歯がたがた鳴り、かみ合わない。服を着る間がない。はだしのまま防空壕に飛び込んだ。甲府は盆地のため、周りから落としてきているらしい。

家の周りに植えてあるカボチャの棚が燃え始めた。アッ、障子もだ。私の家だけではない。近所の家もメラメラ燃え始めているのだ。

「逃げなくては危ない」とどなる父の声。

気弱になった母は、「お父ちゃん、もう逃げたって到底助からないよ。どうせ死ぬなら、この中で死のう」と防空壕から出ようとしなない。

「ここにいたら焼け死ぬか直撃を受けて死ぬかのどちらかだ。私たちはお母ちゃん、そんなこと言っていないで逃げよう。とにかく逃げよう」

と言って、みんなで作って母を引っ張り出した。道路は火の海だった。逃げまどう人々でいっぱいだった。父は末の弟を抱いて走った。そのあとをみんなついていった。山手の方に逃げた。けれどもすぐ行きづまりになってしまった。火にはばまれて、もはや前にも後ろにも行けなくなってしまう。燃えていないところを探したすえ、やっと川が見つかった。すでに逃げてきた人々でいっぱいだった。ところが、そこも火の粉でじっとしていることができない熱さだった。父は川の水をくんで私たちにかけてくれた。一晩中かけ続けてくれた。明け方になって、やっと敵機は去った。私たちは助かったのだ。青空はなく、赤く濁った空が重くのしかかっていた。私たちは父に連れられて、重い足を引かずりながらわが家へ向かった。

昨日までは空襲のサイレンを聞きながらもやはり楽しい家だったのに……。すべての家々も無惨に焼けただれ、柱だけがごろごろしていた。ここまで来ると、中の焼けたデパートが2軒ボツンと建っている。あとは見渡す限りの焼け野原だった。その中に焼け死んだ黒こげの人が横たわっていた。私はおもわず目をおおった。この近くに母の実家があった。

甲府

山梨県甲府盆地北部にある市。1945年(昭和20)7月6日の夜、7月7日にかけて、アメリカ軍B-29爆撃機により、甲府が爆撃を受けた。(甲府空襲)甲府市内は火の海となり、市街地の約74%が焼きつくされ、1100人を超す人が亡くなった。(甲府市ホームページより)



空襲
航空機から地上を爆撃したり銃撃したりすること。

B-29

アメリカのボーイング社が第二次世界対戦中の1942年(昭和17)に完成した長距離爆撃機。日本本土の軍事施設を破壊するとともに、都市に対する無差別爆撃を行い、戦局に大きな影響を与えた。広島と長崎に原子爆弾を投下したのも同機である。

防空壕

空からくる敵の攻撃に対し、避難するために掘ってつくった穴やみぞ。

無医村に疎開して

東大阪市 法橋 順子 83歳

もちろん焼けていた。焼け野原を歩いてきた母が突然、「ああ……」と言ったまま、前に倒れてしまった。祖母はどぶの中へ顔をつっこんで死んでいたのだ。私たちも声が出なかった。水がほしかったのだろう。火に包まれた中で、次第に呼吸を奪われていった祖母。祖母だけではない。戦争さえなかったらこんな犠牲者を出さずに済んだのにと、小さい私の胸には、戦争はいやだと強くきざまれた。



甲府空襲 写真提供：甲府市教育委員会

大阪も空襲にあうかもしれない。アメリカは京都や奈良は空襲をさけるようだ。その頃、学生会館が所有する医家向けの家が奈良県のはずれにあるが……という話を学校長をしていた父が聞いてきた。母は大阪済生会病院で初めての女医だった。考えた末、奈良の無医村に引っ越すことになった。

母はどんな患者さんも診なければならなかった。小児科も内科も外科も産婦人科もひとまとめに。そのうえ、夜中にもよく叩き起こされ、農家のリヤカーにひかれ、遠くまで往診に行くのも珍しいことではなかった。

父と私たちは「くわ」をかつぎ、遠い畠まで通う生活が始まった。こうした疎開先のくらしの中で私と妹は、大阪市内では考えられないような経験をした。小川に行つて小魚や小エビをとり、畦に出てはタニシ、どじょうやザリガニをとり、原っぱではこべ、よもぎ、よめな、セリ、つくし、と食べられる野草を摘んだ。近くの山に入って、たきぎにする枯れ枝を集めてわらでくくり、背中にかついで帰ることも覚えた。

父からよく観察して育てるようにと言われて、「にわとり」「あひる」

医家
医療を行う家・家系。医者。医師。

無医村
医師のいない村。

疎開
空襲・火災など、戦争の損害を少なくするため、都市に集中している住民や建物を地方に分散すること。



「うさぎ」を、また蚕も飼った。母は患者さんから「先生、お金がないんです。治療代、いもでもいいですか」とよく言われ、そのたびにうなずいた。食糧事情は日々悪くなり、食卓の上には、さつまいもやじゃがいもだけだったり、時にはうすい雑炊が載っていた。

文化的に何もない土地だったが、父の**京都帝大**時代の友人たち（ジャーナリスト、弁護士、作家、教師など）が空襲の魔除けのように我が家を集まり出した。母は苦心して一品を作ったり、お酒が一滴もなくなった頃は、調剤室にあった**苦味テンキ**やアルコールを薄めて出したよ。うだ。さつまいものつるをきざみ、一升瓶に入れて発酵させたものも作った。

ある日、こうした集まりの最中、昔父が教えた生徒が「明日、戦地に行きます」と報告をしにきた。彼は日本名を名乗っていたが、突然「僕ふるさとの歌を、お別れに歌ってもいいですか?」と聞いた。みんな静かになり、私たちも母のそばに座った。

「**アリラン**、アリラン、アラリヨ、アリラン峠を越えていく……」と、涙を流しながら彼は歌った。初めて聞く歌だったが、母が涙を流し、私

たちも悲しくなって泣いた。恐らく父も友人たちも胸をつまらせたに違いない。父が、玄関で「身体に気をつけて、元気で帰ってこいよ」と彼を送り出した。だが、はたして彼は、その後日本に帰れたのだろうか。

時局がどんどん暗くなる頃、父たちの集まりの中で、新聞社にいた父の友人のひとりが、「私のラバさん、酋長の娘……」と歌いながら、おもしろおかしい身振り、私たちを笑わせてくれた。

まもなく疎開地のこのあたりにも、**グラマン**が低空から**機銃掃射**を始めて、戦争の恐ろしさを思い知らされた。

大阪にも大空襲があった日、ちょうど父も母も大阪に出かけていた。夜の暗闇のなかで、生駒の山の端が真っ赤に染まるのを見て、父母の無事を祈り続けたことが忘れられない。

それから、また大変だった。東京や大阪を空襲で焼けだされた親類や父の友人の家族たちまでがぞくぞくとわが家につめかけた。子供心にこれは食糧を奪い合うみじめな生活だったという記憶がいまも残っている。

苦味テンキ

(苦味テンキ) 橙皮・センプリなどの生薬のアルコール浸出液。健胃薬。

アリラン

朝鮮の代表的な民謡。各地にあるが、いずれもアリランで始まり、哀愁に満ちた三拍子の曲。

京都帝大

京都大学の前身。1897年(明治30)に設立。第三高等学校などを合併して、1949年(昭和24)に新制大学として発足。2004年4月より国立大学法人へ移行。

グラマン

アメリカの航空機会社グラマン社が製造したアメリカ海軍の艦上戦闘機。第二次大戦中の海軍主力戦闘機。

機銃掃射

機関銃の銃口を動かし、敵をなぎ払うように射撃すること。

川面の油で燃え広がる炎

2日後に6歳の誕生日を迎える日、その地獄はやってきました。当時は自動車などは少なく、荷物の運搬は荷車で、それを引っ張る馬がたくさん飼われていました。

B-29が飛んで来て、大阪の町に爆弾が雨のごとく落とされました。あちこちで火の手が上がリ、町は火の海のように、父と母は家の消火のために残り、1歳の弟を背負った祖母に手を引かれ、祖父のいる冷蔵庫会社に向かいました。

防空頭巾に水をかけてもらい、火の粉の中、人の渦の中を走りました。前から、顔が焼けただれた馬が前脚を上げ、人をひづめながら走り去りました。顔半分をえぐり取られたような人が倒れていても、みな自分が逃げることで精いっぱいです。ようやく祖父のところにとどり着き、扉が30センチもある冷蔵庫の中に逃げて、外が明るくなるのを待ちました。

やがて飛行機の音も聞こえなくなり、外に出て目を疑いました。道の向こうは、石炭が燃えてゴーと音を立てているし、川には真っ赤な炎がゆらゆらと流れています。赤い川です。川面の表面の重油が燃えている

のだそうです。人や馬がたくさん焼け死んでいました。その中で馬の尻の肉が切り取られています。食べものがないので、食べた人がいるのかもしれない。

家も、幼稚園も焼け、お友だちもいなくなっていました。祖母がおなかに巻いていたお米と小豆を飯盒で炊いて、お誕生日を祝ってくれました。

1日が過ぎ、何もないところでは住めないのです。母と私たちは父方の里、篠山の方に行くことになりました。大阪駅に着いて、何も残っていない町を見、その向こうの海を見た母の目から大粒の涙が止まらなかつたことを覚えています。

汽車に乗るにも、私は窓からよそのおばちゃんに抱っこされ、弟を背負った母は後ろから押ししてもらって、やっと乗車できました。トンネルを抜けると顔にすすがついて、あちこち黒くなっています。また煙を吸い込んで、むせている人もいました。

篠山に着き、山や川、畑を見て、生きているという実感がわきました。2時間近く歩き、親戚の家に着き、お風呂に入れてもらい、ご飯をいた

B-29
アメリカのボーイング社が第二次世界対戦中の1942年(昭和17)に完成した長距離爆撃機。日本本土の軍事施設を破壊するとともに、都市に対する無差別爆撃を行い、戦局に大きな影響を与えた。広島と長崎に原子爆弾を投下したのも同機である。

防空頭巾
戦時中、空襲などの際に飛来物から頭を守るためにかぶった綿入れの頭巾。



飯盒

野外で煮炊きするための携帯用の炊飯具。アルミニウムなどで作った底の深い容器。



私の戦争体験

堺市 川崎 幸子 90歳

いただきました。そのおいしかったことは今でも忘れません。

その家に、私と同じ1年生になる男の子がいました。その子のランドセルや文具品を見たとき、何もない私は悲しくなりました。でも母が手さげ袋や草履袋を縫ってくれ、誇らしい気持ちで入学式に行ったことを思い出します。

毎年、近くの学校の1年生を見ますが、色とりどりのランドセルを背負って、楽しそうに話をしながら登校するのを見るたびに、この平和が長く続きますようにと、祈るばかりです。



大阪大空襲 写真提供：大阪国際平和センター

昭和16年12月8日 **大東亜戦争**

私は京都同志社女学院の1年生でした。でもその時は何も知らず、英語を少し習っていましたが、それがなぜだめでいけないのかがわかりませんでした。同志社には外国の先生がおられました。なぜそのミスデントン先生が別の棟でひそかにしておられたのかも、その時はわかりませんでした。

私の父はその時軍人で、**将校**でしたので、戦争に行きました。私たちは京都から堺へ引っ越しましたが、戦争が厳しくなり、父の里の滋賀県に疎開することになりました。私も転校することになって、滋賀県立草津高女に汽車で通学しました。ですが3年生の時、急に**学徒動員**で、私たちの学年だけが親元を離れて行くことになり、名古屋の三菱名古屋航空機へ50人の同級生と先生2人と飛行機を作りに出発しました。行けば、工場には兵隊さんや朝鮮からの女の子がたくさん働いていました。私たちも毎日、**神風**のはちまきをして、**軍歌**を歌いながら行ったのは、少しは楽しい思い出です。

しかし昭和19年の秋のこと、**遠州灘の大地震**で私たちの工場はペッ

大東亜戦争

1941年(昭和16)の開戦から1945年(昭和20)の降伏調印までの日本「大日本帝国」とアメリカ・イギリス・オランダなどの連合国との戦いのこと。

将校

軍隊における階級区分の一つ。軍隊の中で指揮官クラスの階級を持つ軍人に対する総称。

学徒動員

第二次世界大戦中、深刻な労働力不足を補うために、中等学校以上の生徒や学生が軍需産業や食料生産に動員されたこと。

神風

神が吹き起こすという風。特に、元寇(げんこう)の際に吹いた激しい風。

軍歌

軍隊の士気を盛んにし、また愛国心をふるいたたせるために作られた歌。



鹿材で建てられたバラック

シャンコになり、私はその下敷きになりました。気がついたとき、私だけが助かって生きている、と思いました。その時、先生の「こちらから出なさい」の声。屋根伝いに広場に出ました。幸いなことに無事でした。しかし朝鮮の女の子たちは何人か亡くなった、とのこと。はるばる遠い朝鮮から来た子たちなのに…。

それから私たちは家に帰れると思っていたのに、また**工場疎開**になり、今度は汽車に乗り、富山の大門のクレハ紡績が飛行機を作る工場になり、勉強なんか何もできません。その時は嬉しいようで、今は残念です。

もう昭和20年です。毎夜、富山の空をたくさんさんのB-29がどんどん大阪の方へ飛んでいき、心配です。先生が「加藤さん、一度堺へ行ってごらん」と言われ、堺へ帰りましたが、私の家はありませんでした。「どうしよう」と思っていた時、母が防空壕から出てきて、嬉しかったけれど、妹たちが誰もいません。今度は母の里(奈良)へ。私もすぐに行き、8月15日の思いもよらない天皇陛下の**玉音放送**を聞き、私はホッとしました。終戦後は堺に帰り、みんなと焼け跡の柱や板を拾い、**バラック**を建て、どうやら6人が寝られました。あのような生活は二度といや、あの時の

ことは一生忘れない。

父は**シベリア**で亡くなりました。

母は5人の子どもを立派に育ててくれて、97歳まで生きました。

私はあまりよい青春時代ではなく、よい思い出もあまりありませんが、

今はひ孫が6人、幸せです。90歳、元気です。



堺空襲 写真提供：堺市

遠州灘の大地震

東南海地震。1944年(昭和19)12月7日、紀伊半島南東沖の熊野灘・遠州灘海底へかけての広い地域で発生した地震。津波は伊豆半島から紀伊半島の沿岸を襲った。

工場疎開

建物疎開とは異なり、重要工場を安全な場所に移転させること。日本では太平洋戦争末期に、「工場緊急疎開要綱」(1945年2月23日閣議決定)などに基づいて、航空機工場や兵器工場の地下施設化や、工作機械類の移動が行われた。

玉音放送

1945年(昭和20)8月15日正午から、昭和天皇自らが太平洋戦争終結の決定を国民に伝えるために行った録音放送。

バラック

本来は駐屯兵のための細長い宿舎のこと。転じて、空地や災害後の焼け跡などに建設される仮設の建築物のこと。

シベリア

ロシア連邦の中部から東部にかけての地域。シベリアに連行された日本の軍人・軍属はマイナス30度を下回る厳しい環境で強制労働を強いられた。衛生環境や食料事情も悪く、飢えや病気によっておよそ6万人が命を落とした。



西宮空襲

東大阪市 藤井 静子 93歳



空襲による火災は次々と燃え広がり、多くの死傷者を出した

昭和20年6月、当時女子薬専(現大阪薬科大学)3年在学中だった私は、登校途中、終点梅田の手前で**空襲警報**発令、すぐ下車させられて、近くの防空壕へ入れられた。前期定期テスト中だったが、1時間以上経っていたので受験できず、その日はあきらめて追試験を受けることにした。追試験は80%しか点がとれないので、少しでもよい点をとるべく勉強していた。

8月5日夜11時頃、**警戒警報**に続いて**空襲警報**「太平洋上を北に向かう敵数機の編隊があります。今日は西宮を攻撃するもようです」とのラジオに、急ぎ母と妹を起し、**隣組**の壕へ。その時すでに**照明弾**と**焼夷弾**が落ちてきていた(父は出張中で留守)。壕も危険となり、母の取り出してくれた夏ぶとんを**防空ずきん**の上からかぶり、行き慣れた道を走った。大関の多くの酒蔵やまわりの家々から火がふき出している。猛火に包まれた柱や梁が飛んでくる。焼夷弾もどんどん降ってくる。どのように走ったかわからない。火の道を200メートルほど行ったところで妹が悲鳴をあげた。「もう行かれへん」「行ける。行きなさい」母が叫んだ。ようやくたどりついた神社で、先に来ていた人たちとともに土塀にへば

りついて焼夷弾を避けた。
東の空が白みかけた頃、やっと攻撃も終わった。我が家の方を見ると、見渡す限り火の海、何も残っていない。あ~~~~~~~~ぐうの音も出なかった。「小学校が残っている、あそこへ避難しよ」という誰かの声に、みんなでとぼとぼと今津小学校まで歩いた。どのように歩いたかわからぬまま、学校の廊下へ座り込んで父の帰りを待った。転げるように帰ってきた父が「よう生きてくれた」と言ったまま、あとの言葉もなかった。お土産にもらったというトマトもぐじゃぐじゃになっていた。

神社へたどりついた人たちも私たちも、火傷一つなく無事だったことはありがたいことだった。今津の駅前では遺体が焼却炉へどんどん放り込まれ焼かれたと聞いた。むごいことだ。私たち3人も神社や母の祈りで助けていただいた。後ろから来た母は、どんな思いで祈り続けていたかと思うと、今も胸が痛む。

翌日、やっこの思いで京都の親戚へ。車中、とめどなく涙が流れ落ちた。京都で知らない人から、いろいろのものを恵んでいただき、助けて

西宮空襲

1945年(昭和20)5月11日、8月6日にかけて、5回にわたる空襲により西宮市の罹災面積は22万5千坪で、全市面積の約20%にのぼった。県下で2番目という被害であり、死亡者637人、重軽傷者2353人、全焼全壊約1万5300戸、被災者6万6500人余という大惨事であった。

空襲警報

敵軍の航空機による爆撃被害が出ないように、市民に知らせる警報。

警戒警報

敵機の空襲のおそれがある場合に出された警報。

隣組

1940年(昭和15)に制度化された国民統制のための地域住民組織。5〜10軒を一単位として部落会・町内会の下に設けられ、配給・供出・動員など行政機構の最末端組織としての役割を果たした。

照明弾

夜間の戦闘で照明や信号に用いる弾丸。主としてマグネシウムを用い、数秒から数分光を発する。

焼夷弾

敵の建造物や陣地を焼くことを目的とした砲弾や爆弾。木造の日本家屋を効率よく焼き払うために使用された。

防空ずきん

戦時中、空襲などの際に飛来物から頭を守るためにかぶった綿入れの頭巾。



鍋を持って配給に並ぶ人々

いただいた。知人の家に世話になり、その後、父の郷里の島根県へギョウギウづめの列車につめこまれてたどりついた。一週間ばかり滞在して帰阪。行きの汽車の中で終戦を知った。しかも敗戦。なんということだ。

とにかく戦争も終わり、父が求めてくれた100坪以上の土地付き住宅で野菜作りをして、ゆっくり暮らすことができた。でも私は卒業まですべきことがいっぱいある。すべてを焼失してしまったため、まずノートを友だちに借りて写したり、本は先輩に借りたり、古本屋で買ったりして、翌年の卒業試験に間に合わせた。当時は戦時中のため、繰り上げ卒業、3年半の学生生活だった。昭和21年9月末、無事卒業できた。薬剤師免許も無事、獲得できた。

この8月5日という日は、生き延びられた記念日として、毎年赤飯で祝っている。忘れかけていても、夫が「今日は記念日と違うか」と言ってくれる。あの恐ろしかった日は決して脳裏から離れることはない。今年も73年目の記念日を祝うことができた。

あの日助けていただいた福應神社や今津小学校へもお礼に行きたいと

思っているが、老化のため不可能。この日下町からいつも西を向いてお礼申している。どうかおゆるしくください。

(追伸)

私たちの世代がいなくなれば、もうこの戦争を知る人がなくなり、空襲のみならず、食糧や衣類まで配給、衣料切符が必要でした。お米も1人1日2合3勺から2合1勺となり、主食として**なんば粉**になり、これも配給。買い出しに行ったり、**闇米**を求めたり、大変でした。**経済警察**につかまったら取り上げられるので、気づかひながら帰ったものです。

罪もない人々を犠牲にした、あの恐ろしい戦争はもう決してあってはならないことです。文系の大学生も**学徒兵**(学業なかばでの軍人)として戦地へ。私たちも見送りました。

これからはずっと世界中が平和でありたいものです。お読みいただきありがとうございます。乱筆、乱文おゆるしくください。

配給

統制経済の下で、不足しがちな物資の流通を統制し、特定の機関を通じて一定量ずつ売ることが。第二次大戦の戦中・戦後に行われた。

衣料切符

衣料を配給するために政府が発行した点数制の切符。1942年(昭和17)から1950年(昭和25)まで続いた。

2合3勺・2合1勺

「合」「勺」は尺貫法における体積の単位。2合3勺は約410ml、2合1勺は約380ml。(1合約180・39ml、1勺約18・039ml)

なんば粉

トウモロコシの粉。パンにして食べたが、パサパサで2口目はのどを通らなかつたと当時を振り返る人も多い。

闇米

販売統制下で、正規の販路によらず、取引される米。

経済警察

第二次大戦中、経済統制違反を取り締まるため設けられた警察組織。

学徒兵

兵力不足を補うため、20歳以上の学生が在学中で徴兵された学徒出陣により、戦争に動員された兵士。

お聞かせください！ あなたの〈声〉

「私の戦争体験」〈第40集〉アンケート提出のお願い

●配送担当者またはお店にご提出ください 締切 9月末まで●

フリガナ		
市町村名	()	
年齢	<input type="checkbox"/> 10代 <input type="checkbox"/> 20代 <input type="checkbox"/> 30代 <input type="checkbox"/> 40代 <input type="checkbox"/> 50代 <input type="checkbox"/> 60代 <input type="checkbox"/> 70代 <input type="checkbox"/> 80代 その他()	

※お預かりいたしました個人情報は、今後の戦争体験を語り継ぐ活動のみに活用させていただきます。

アンケートにおこたえください

1 「私の戦争体験」をお読みいただきましたか。

(イ) 毎年読んでいる (ロ) 今回初めて読んだ (ハ) 読んだことはない

2 今年の「私の戦争体験」は読みやすかったですか。

(イ) 読みやすい (ロ) 読みにくい

理由：

3 あなたの戦争体験はありますか。

(イ) ある (ロ) ない

●(イ) ある とお答えいただいた方にお聞きします。戦争体験を寄稿していただけますか？

(イ) はい (ロ) いいえ (ハ) その他()

4 「私の戦争体験」の発行を今後も続けていきたいと思っています。

戦争体験を書いていただけの方のお名前・連絡先など

お名前	年齢	連絡先	〒	-	TEL.	()
あなたとの関係・続柄をお書きください						

裏面につづく

せん そう たい けん

戦争体験

堺市 匿名T 80歳

私が6歳の時、1年生でした。学校に着くとすぐに空襲のサイレンが鳴り、すぐに家に帰りました。家には母と私だけで、お父さんは戦争に行き、兄弟は姉2人と兄がいましたが、姉2人は四国に疎開してしました。私と母は大阪の九条に住んでいましたが、大変でした。兄は家から出て、お父さん代わりに働いていました。家には防空所を作り、空襲のサイレンが鳴ったら電気を消し、暗くして、母と2人で避難をしていました。なんとも言えないほど、子どもながらに怖かったです。表に出た時はあちらこちらと男女の見分けがつかないくらい黒こげの人が重なって死んでいました。なんとも言われないくらい不気味でした。空襲の解除が鳴り、防空所から出た時は、なんとも言えないくらい幸せに感じました。これからはこのようなことを祈り、幸せな毎日でありますように祈ります。

空襲
航空機から地上を爆撃したり銃撃したりすること。

疎開
空襲・火災など、戦争の損害を少なくするため、都市に集中している住民や建物を地方に分散すること。

防空所
家の中の床下を掘った待避所。焼夷弾が落下したらすぐ飛び出して消火せよ、という方針で作られたが、これでは頭上の猛火に向けて床下から這い上がることは不可能で、実際に多くの人が床下で命を落としました。